

山形県大蔵村における雪を活かした地域活性化の取り組みについて —「公益学」に依拠した考察—

小野英一*1

1. はじめに

雪は、いわゆる雪害をもたらし、社会に損害を与え、人びとの生活を不便にするものである。しかしながら大蔵村においては、大量の降積雪とそれがもたらす雪害と向き合いながらも、日本有数の豪雪地という個性を前面に出し、雪を地域資源として活かして地域活性化につなげる様々な個性ある取り組みを行っている。地域活性化の取り組みのスタートは、地域に様々な素材を地域活性化に向けた地域資源として認識し取り上げること、すなわち着眼することにあるが（宮副[2014]）、大蔵村はまさに「雪」という地域資源に着眼したのである。

本稿は、大蔵村における雪を活かした地域活性化の取り組みについてまとめたうえで、新進の学問「公益学」に依拠し、考察を行うものである。

本稿の構成については以下のとおりである。続く第2章では、本稿の考察において依拠する「公益学」について概説する。第3章では、大蔵村における雪を活かした地域活性化の取り組みについてまとめる。第4章では、以上を踏まえながら、大蔵村における雪を活かした地域活性化の取り組みについて「公益学」に依拠して考察を行う。第5章で全体をまとめ、今後の研究課題について述べる。

2. 「公益学」について

本章では、本稿の考察において依拠する「公益学」について整理する。

21世紀は「公益」をキーワードとした「公益の時代」と評され、「公益」の視点で様々な社会事象を分析するとともに、社会問題を乗り越え、「公益」の理念を活かした公益社会の実現を目指す時代に入っている（小松[2000]; [2002]; [2004]）。この「公益」と向き合う新しい学問こそが「公益学」である。

1990年代後半に市場原理への不満や様々な社会の矛盾・問題が表面化したことなどを背景として、「公益」に光が当てられ、「公益学」への期待が高まる中で「公益学」が誕生した（小松[2000]）。「公益学」のこれまでの歴史を俯瞰すれば、1990年代後半からの「公益学」研究に対する機運の高まり、その中から生まれた「公益学」の成立、その核である2000年の日本公益学会の設立および2001年の東北公益文科大学の開学、両者を中心とした2000年代以降の「公益学」研究の蓄積、体系化の進展と概括することができる（小野[2012]）。このように「公益学」が成立して

約20年が経ったところであるが、「公益学」は現在もその体系化が進められている発展途上の新進の学問といえる。

「公益学」について小松[2004]は以下のとおり説明している。「公益学とは、人間の考えや活動のうち、非営利で不特定多数を相手にするものを総合的に明らかにする学問である。あわせて公益の視点から人間やその活動、文化や芸術、地域や環境、自然や景観などを見直し、より良い生活やより良い社会のあり方を追求する学問でもある」（小松[2004]p.294）。

日本で初めて「公益学」に取り組む大学として2001年に設立され、これまで「公益学」研究を進めてきた東北公益文科大学では、「公益学」の研究領域として経済、行政・財政、経営管理、国際協力、教育、福祉、医療、環境保全といった様々な分野を挙げている（東北公益文科大学[2002]）。

つまり、「公益学」とは、そうした様々な研究領域がある中で、それぞれの研究領域において「公益」という観点からアプローチするという新しい学問なのである。この全体像については図1のとおりである。

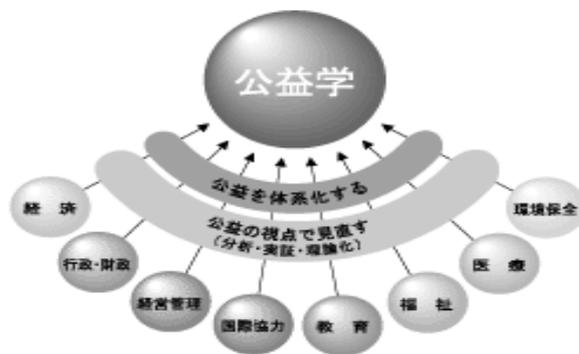


図1 「公益学」全体の構図
(出典) 東北公益文科大学[2002]

3. 大蔵村における雪を活かした地域活性化の取り組み

3.1 大蔵村の概況

大蔵村は山形県北部に位置する最上郡の村である。大蔵村の総面積は211.63平方キロメートルであり、そのうち山林面積が全体の約85%を占めている。村の中央部を南北に走る国道458号に沿って27の集落が点在しており、山村としては珍しく広々とした台地が各所にあり、農耕地や酪農地として利用されている。807年の開湯以来約1200年の

*1 東北公益文科大学

歴史をもつ肘折温泉郷があり、周囲は比較的岩肌の多い山々となっている（大蔵村ホームページ「村勢要覧」）。

大蔵村の人口は3,412人、世帯数は1,016世帯である。産業別就業者割合については、第一次産業従事者が21.6%、第二次産業従事者が28.9%、第三次産業従事者が49.5%となっている（平成27年国勢調査）。大蔵村の基幹産業は農業であり、水稻を中心に、土地利用型のそば、トマトやきゅうり、たらふの芽などの園芸作物が盛んである（山形県ホームページ「やまがたアグリネット 大蔵村の新規就農支援策」）。

「大蔵は雪の村」と評されるとおり（大蔵村史編纂委員会編[1974]）、大蔵村は日本有数の豪雪地として毎年非常に多くの雪が降る村である。大蔵村における降積雪の状況は表1のとおりである。

表1 大蔵村における降積雪の状況

（単位：cm）

地区名	清水		沼の台		肘折	
	最高降雪	最高積雪	最高降雪	最高積雪	最高降雪	最高積雪
2007年	32	68	45	170	53	221
2008年	52	146	55	297	123	328
2009年	48	83	57	213	88	280
2010年	47	125	61	243	90	285
2011年	39	222	65	243	87	342
2012年	42	218	83	371	121	400
2013年	38	173	50	303	47	357
2014年	43	152	62	271	69	340
2015年	60	157	62	230	46	266
2016年	57	113	95	238	66	276
2017年	75	260	105	405	71	445
2018年	70	167	70	297	73	317
平均	50	157	68	273	78	321

気象庁データ、村積雪量調査 測定は午前9時現在

（出典）大蔵村資料「村勢要覧 DATA ROOM 平成31年度版 資料編」より筆者作成

3.2 地面出し競争

本章では大蔵村における雪を活かした地域活性化の取り組みについて、「地面出し競争」、「ドカ雪・大雪割キャンペーン」、「雪だるま「おおくらくん」新雪発送」を取り上げ、まとめる。

「地面出し競争」は、「いかに速く雪を掘って地面を出すか」を競う大会である（写真1参照）。2009年に閉校した旧肘折小中学校の雪上運動会で28年間継承されてきた伝統を持ち、2020年2月に開催された大会で通算39回目

の開催となった（Oh!蔵SPORT[2019]）。なお、2021年の大会は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止となっている（山形県大蔵村肘折温泉地面出し競争WORLD CUP in Hijioriホームページ「第12回地面出し競争World Cup in 肘折」の中止について）。2010年の第1回大会は、村民の参加者を中心に9チームが参加したが、年々参加者は増え、日本各地そして海外からの参加もあり、近年では約40チームが参加している（大蔵村[2018]）。



写真1 地面出し競争の会場風景

（出典）大蔵村[2015]p.7

地面出し競争の基本ルールは以下のとおりである。メンバーは1チーム6名までとし、直径4メートルの競技フィールド内において、スコップ4丁、スノーダンプ2台を使って雪を掘り、地面の土を審判員に届けるまでの時間を競い合う。第1位、第2位、第3位のチームには、それぞれ金、銀、銅のスコップが授与され、パフォーマンス賞やブービー賞もある（Oh!蔵SPORT[2019]）。

「地面出し競争」の運営の中心となるのが大蔵村総合型地域スポーツクラブであるNPO法人「Oh!蔵SPORT」である。NPO法人「Oh!蔵SPORT」理事の早坂隆一氏は、「地面出し競争」の発案について以下のように述べている。「（東京からのUターンで：筆者注）久しぶりに戻った故郷では少子化が進み、卒業した小中学校は09年に閉校した。地元の旅館や商店の若手らからなる「肘折青年団」の団長として、地域おこしができないか考えた。県外で暮らした学生時代やサラリーマン時代に気付いた地元の魅力を生かせば、外の人はずっと「面白い」と思ってくれるはず。10年の冬、かつての雪上運動会でも行われていた地面出し競争を地域のイベントとして開くことにした」（『読売新聞』2015年11月30日付け 山形版）。「肘折の外に進学や就職で出たときに、地面出し競争のことを話すとみんなが面白がってくれた」（大蔵村[2018]pp.2-3）。

スコップ、スノーダンプは除雪の道具であり、通常は

表2 第6回「ドカ雪・大雪割キャンペーン」

①ドカ雪割			
前日15時までの 24時間降雪量	宿泊料 (1人1泊につき)	入浴料 (1人につき)	2月限定
30cm～59cmの場合	1,000円の割引	200円の割引	宿泊料割引2倍
60cm以上の場合	2,000円の割引	400円の割引	
②大雪割			
宿泊日前日15時の積雪深が446cm以上 (過去最高積雪深更新)		1泊分宿泊料10,000円まで無料 買物(飲食含む)500円割引 ※期間中1回のみ	

(出典) 大蔵村観光協会[2020]

道路や土地に積もった雪を取り除き、道路や土地の移動・活動空間を確保するために行われるものである。除雪は積雪地域で冬季の日常生活の維持を目的に、取り除く対象として雪を捉えている(筒井[2018])。つまり、通常はスコップ、スノーダンプで雪を掘るということは、日常生活を送るうえで障害となる雪を取り除くというネガティブなものである。「地面出し競争」については、まさにそれをポジティブに転換し、競技・ゲームにすることによって雪を楽しもうとするものである。また、大変話題性・独自性のある取り組みであるといえる。

2019年度の「第2回未来かがやくやまがた景観賞」²⁾(山形経済同友会主催)において、NPO法人「Oh!蔵SPORT」の「地面出し競争 World Cup in肘折」が最高賞の「山形県知事賞」を受賞した。この「第2回未来かがやくやまがた景観賞」の最高賞「山形県知事賞」受賞により、「地面出し競争」はこれまで以上に知名度を増し、注目を集めている。

3.3 ドカ雪・大雪割キャンペーン

豪雪地ならではの企画として打ち出されたのが、降積雪量が多いほど旅館の宿泊料、入浴料、店舗での買物・飲食料が割引になるという「ドカ雪・大雪割キャンペーン」である。2020年度の「第6回ドカ雪・大雪割キャンペーン」の内容は表2のとおりである(大蔵村観光協会[2020])。

これまでに大蔵村観光協会や旅館には、「肘折温泉の雪景色が好きなので大雪の日にもまた来たい」、「いつも気象庁の降雪データを気にしている」という声が寄せられている(『読売新聞』2018年1月20日付け 東京夕刊)。大蔵村観光協会の木村裕吉会長は「これまで冬の積雪期はオフシーズンの位置づけだったが、観光の素材として豪雪を前向きにPRしていきたい」と話している(『朝日新聞』2018年11月28日付け 山形版)。

大雪は雪害をもたらす、社会や人々の生活に損失を与えるものであるが、「ドカ雪・大雪割キャンペーン」はこの大雪を逆手に取ることにより、大きな話題性・独自性へとつなげていく取り組みであるといえる。

沼野[2006]は「雪国に人々が暮らし続けるためには、雪を地域資源、地域個性として捉えなおし、それを活用する雪国ならではの暮らし方を再創造することによって、ハンディを無意味なものにしていくことにしか活路はないだろう」と論じているが(沼野[2006]p.7)、「ドカ雪・大雪割キャンペーン」は大雪という「ハンディを無意味なものにする」ということを超えて、「ハンディを逆にアドバンテージとする」好例であるといえる。

3.4 雪だるま「おおくらくん」新雪発送

大蔵村では、村公式キャラクターである雪だるまの妖精「おおくらくん」をかたどった発泡スチロールの容器に、大蔵村の新雪を詰めて全国に発送する事業を2019年度に開始した。「おおくらくん」は全国のご当地キャラクターが人気を競う「ゆるキャラグランプリ」の2018年大会において、「ご当地」部門(507体参加)第64位(山形県勢では第1位)となっている(『読売新聞』2018年11月20日付け 山形版)。

「おおくらくん」は、特注で製造した雪だるま型の発泡スチロールの中に、積もったばかりの新雪を詰め込み発送する。発泡スチロールの中の雪を取り出し、同封するマフラーや目玉のパーツを雪だるまに取り付けることで、「おおくらくん」が完成する(写真2参照)。



写真2 「おおくらくん」

(出典) 大蔵村ホームページ「新雪を詰めた雪だるま「おおくらくん」ができました」

雪が解けて無くなった後は、発泡スチロールにパーツを取り付けて飾ることもできる。販売価格は3,600円(送料別)であり、冷凍の宅配便で発送される(『山形新聞』2019年12月13日付け; 肘折いでゆ館・カルデラ温泉館のホームページ「肘折温泉の雪を詰めた 雪だるま「おおくらくん」販売」)。

当事業の発案の契機は、タイから来た外国人観光客だ

った。当観光客は雪を初めて体験し、当観光客から「雪を持ち帰りたい」という要望が大蔵村に寄せられた。大蔵村産業振興課で村観光プロデューサーを務める小林孝一氏が中心となり、タイの旅行会社と協力して現地に雪を空輸できるかの実験を行った。そして、雪を詰めた発泡スチロールを国際便でタイに送ったところ、4日後に現地に届き、雪はほとんど解けていなかったという（『読売新聞』2020年1月22日付け 山形版）。小林孝一氏は「大蔵村といえばやはり大雪。雪の降らない地域を中心に需要があるのではないか」と話している（『山形新聞』2019年12月13日付け）。

雪は多雪地域ではありふれたものであるが、雪の降らない地域では雪は極めてめずらしく、希少価値が高いといった点に着眼したものであり、当事業は着眼の優れた企画であるといえる。

4. 「公益学」に依拠した考察

4.1 「公益原理」と「経済原理」の調和の観点から

本稿では「公益学」に依拠した考察を行うが、考察枠組みとして用いるのは小松隆二の「公益」論（小松[2000]; [2002]; [2004]）である。小松隆二の「公益」論は、「公益学」の成立と体系化を先導した小松隆二による一連の「公益学」研究により蓄積・構築されてきた「公益」の知見であり、「公益学」研究において用いられる考察枠組みとして最も代表的なものである。具体的には、「公益原理」と「経済原理」の調和、「参加・協力・連帯」という「公益」の要素を取り上げ、それらの観点から考察する。

はじめに「公益原理」と「経済原理」の調和について取り上げる。「公益原理」は「公益学」研究において構築されてきた「公益学」独自の鍵概念であり、「公益学」において最もオリジナリティの高いものである。

「公益原理」については従来の「経済原理」と対極に位置付けられるものであることから、「経済原理」との対比で説明される。「公益原理」についての説明は以下のとおりである。「市場原理³⁾に基づく営利の活動が経済活動であり、自分を超えて非営利の公益原理に基づく活動が公益活動である」（小松[2004]p.16）。「公益と私益は理念的には反対の極に位置する。一方がサービスを媒介にした非営利の〈世のため人のため〉の公益活動であるのに対して、他方が商品を媒介にして自らのために営利をあげる経済活動である」（小松[2004]p.68）。

両原理の関係については、原理的には対立するものの、互惠、調和の関係もある。特に「公益原理」と「経済原理」の調和という関係は重要である。すなわち、これまでは「経済原理」に傾斜して「公益原理」が不十分であ

ったことから様々な問題があり、これからは「公益原理」にも光を当て「公益原理」を回復・拡充させることにより、「公益原理」と「経済原理」の調和による「公益」の実現が目指されるというものである（小松[2000]; [2002]; [2004]）。

「ドカ雪・大雪割キャンペーン」、「雪だるま「おおくらくん」新雪発送」はビジネスと地域活性化を融合させており、「公益原理」と「経済原理」の調和を見出すことができる。すなわち、小松隆二の「公益」論を踏まえれば、企業・旅館・商店にとっては収入・宿泊客・買い物客を増やすというビジネス上のメリットがあり、こちらは「経済原理」に位置付けられる。そして大蔵村・地域にとっては観光振興に資する、知名度を上げるといった地域活性化のメリットがあり、こちらは「公益原理」に位置付けられる。ここに「公益原理」と「経済原理」の調和を見出すことができるのである。

また、「地面出し競争」への参加については、「雪掘りをスポーツとして楽しみたい」、「賞を取りたい」、「競技に勝ちたい」、「仲間と集まって楽しみたい」といった「私益」の動機が基本と考えられる。小松隆二の「公益」論を踏まえれば、これら「私益」の動機については「経済原理」に位置付けられる。しかしながら動機は「私益」であっても、結果として地域活性化という「公益」につながる事となる。これは「私益の公益への転化」（小松[2004]）であり、「公益原理」と「経済原理」の調和の一つに位置付けられる。

以上のように、大蔵村における雪を活かした地域活性化の取り組みには、小松隆二の「公益」論を踏まえれば「公益原理」と「経済原理」の調和を見出すことができる。

4.2 「参加・協力・連帯」の観点から

小松[2004]は「参加・協力・連帯」が「現代の公益の基本理念」（小松[2004]p.41）、「現代のあらゆる公益を代表する行動原理」として（小松[2004]pp.221-222）、「自分や身内のニーズを大切にしつつも、それを超えて地域や社会に参加、協力、連帯することが現代の公益活動の軸になろうとしているのである」と論じている（小松[2004]p.43）。また、「まちづくりもまた、その推進・展開自体に、市民・住民の参加・協力・連帯といった公益の基本となる視点・活動を含め、総合力が必要である」とも論じている（小松[2003]p.8）。

「地面出し競争」、「ドカ雪・大雪割キャンペーン」、「雪だるま「おおくらくん」新雪発送」、のいずれの取り組みをとっても、行政のみ、あるいは行政主導ではなく、むしろ民間主導であり、様々なアクターが「参加」

し、それらの「協力・連帯」により取り組みが展開されている。これらの取り組みに関わっているアクターは、行政、観光協会、旅館、店舗、企業、NPO、住民、地域団体など、実に様々である。

例えば「ドカ雪・大雪割キャンペーン」では、村観光協会が企画のとりまとめ、調整、広報等を行い、旅館・店舗が企画に「参加」し、「協力・連帯」して足並みをそろえてキャンペーンを行い、統一された割引サービスを提供している。

また、「地面出し競争」も様々なアクターが「参加・協力・連帯」しながら開催されている。住民のみならず地元出身者が帰省して参加するケースもあり、2020年の大会では帰省者も加わった肘折小中学校の同級生チームが優勝した。当チームのメンバーである笹井秀美氏は、毎年、大会のために埼玉県から帰省しており、「同級生が集まるいい機会。地域活性化にもなるし、競技がこうして残ってくれてうれしい」と話している（『朝日新聞』2020年2月24日付け 山形版）。地元出身者が帰省して「参加」し、同級生と「協力・連帯」して活動する良い機会にもなっているということである。

清成[2010]は「地域振興の中心的な担い手は、民間の人々であり、企業である。地方自治体は、決して主役ではない。地方自治体は、民間活力を最大限に引き出すべく努力する必要がある」と論じている（清成[2010]p.54）。また、藤井[2019]も「いまや地域づくりは、行政が主体となる政策中心のものから、多様な主体が関わるものとなっている」と論じている（藤井[2019]p.277）。地域活性化の取り組みは、行政のみ、あるいは行政主導では限界があり、民間をはじめ様々なアクターが「参加」し、それらの「協力・連帯」により展開していくことが重要である。

以上のように、大蔵村における雪を活かした地域活性化の取り組みは、様々なアクターの「参加・協力・連帯」によって進められており、小松隆二の「公益」論を踏まえればここに「公益」の要素を見出すことができる。

5. おわりに

本稿は、大蔵村における雪を活かした地域活性化の取り組みについてまとめたうえで、新進の学問「公益学」に依拠し、「公益学」研究で蓄積されてきた知見をもとに考察を行った。そして、大蔵村における雪を活かした地域活性化の取り組みについて、「公益原理」と「経済原理」の調和、「参加・協力・連帯」という「公益」の要素を見出すことができるということを論じた。

今後の研究課題として以下の点が挙げられる。

本稿では「公益」の知見を考察枠組みとした定性的な

考察を行ったところであるが、「公益」の知見から定量的に検証可能な作業仮説を導出し、実証分析を行う研究も可能性が考えられる。こうした実証研究が今後の課題である。

また、本稿で取り上げた「公益」の知見は、概念・理論としてさらに精緻化・高度化させる余地が残されている。「公益学」は発展途上の新しい学問である。今後さらにこの新しい学問である「公益学」を進化させていくとともに、「公益学」に依拠した分析を重ねていくことも今後の課題である。

大蔵村における雪を活かした地域活性化の取り組みは、地域活性化、そして「公益」という観点から他の多雪地域に多分に示唆を与えるものである。今後のさらなる進展が期待される。

注

- 1) 2000年代前半までの「公益学」研究については小松[2004]、2000年代後半までの「公益学」研究については小野[2012]を参照のこと。
- 2) 当賞は「自然や建造物および祭り、踊り、植樹、伝統的なものづくりなど有形・無形の素材で地域振興に貢献し、地域を元気にし未来づくりに情熱を傾けることを目的」として2018年に創設されたものである（山形経済同友会ホームページ「未来かがやくやまがた景観賞」）。
- 3) 「経済原理」、「市場原理」については、小松隆二の一連の論考では厳密な分類は行わずに同様の意味で用いられている。本稿では引用を除き「経済原理」として用いる。

参考文献

- 大蔵村(2015)『広報おおくら』2015年3月号
大蔵村(2018)『広報おおくら』2018年3月号
大蔵村観光協会(2020)『第6回ドカ雪・大雪割キャンペーン』
大蔵村史編纂委員会編(1974)『大蔵村史』大蔵村
Oh!蔵SPORT(2019)『第11回地面出し競争 WORLD CUP IN 肘折』
小野英一(2012)「「公益学」の成立と体系化」『公共研究』千葉大学公共研究センター, Vol.8, pp.171-196
小野英一(2021)「雪を活かした地域活性化—山形県大蔵村の事例をもとに—」『地域活性研究』地域活性学会, Vol.15, pp.219-226
清成忠男(2010)『地域創生への挑戦』有斐閣
小松隆二(2000)『公益学のすすめ』慶應義塾大学出版会
小松隆二(2002)『公益の時代—市場原理を超えて』論創社

小松隆二(2003)『公益とまちづくり文化―「公益の故郷」
山形から』慶應義塾大学出版会

小松隆二(2004)『公益とは何か』論創社

筒井一伸(2018)「“雪かき”から始まる地域づくり」上村靖
司・筒井一伸他『雪かきで地域が育つ―防災からまち
づくりへ』コモンズ

東北公益文科大学(2002)『2003東北公益文科大学ガイド』

沼野夏生(2006)『雪国学 地域づくりに活かす雪国の知
恵』現代図書

藤井正(2019)「地域創造への展望」家中茂他編『新版 地
域政策入門―地域創造の時代に―』ミネルヴァ書房

宮副謙司(2014)『地域活性化マーケティング～地域価値を
創る・高める方法論～』同友館

大蔵村資料『村勢要覧 DATA ROOM 平成31年度版 資料
編』

『朝日新聞』2018年11月28日付け 山形版

『朝日新聞』2020年2月24日付け 山形版

『読売新聞』2015年11月30日付け 山形版

『読売新聞』2018年1月20日付け 東京夕刊

『読売新聞』2018年11月20日付け 山形版

『読売新聞』2020年1月22日付け 山形版

『山形新聞』2019年12月13日付け

大蔵村ホームページ「新雪を詰めた雪だるま「おおくら
くん」ができました」
(<http://www.vill.ohkura.yamagata.jp/news/7222/>)
(最終閲覧日：2021年10月1日)

大蔵村ホームページ「村勢要覧」
(<http://www.vill.ohkura.yamagata.jp/ohkura/gaiyou/youran/>)
(最終閲覧日：2021年10月1日)

肘折いでゆ館・カルデラ温泉館ホームページ「肘折温泉
の雪を詰めた 雪だるま「おおくらくん」販売」
(<http://www.hijiorionsen.jp/>)
(最終閲覧日：2021年10月1日)

山形県ホームページ「やまがたアグリネット 大蔵村の
新規就農支援策」 (<http://agrin.jp/page/24236/>)
(最終閲覧日：2021年10月1日)

山形県大蔵村肘折温泉地面出し競争WORLD CUP in Hijiori
ホームページ「「第12回地面出し競争World Cup in 肘
折」の中止について」 (<http://ohkurasport.jp/jimendashi/>)
(最終閲覧日：2021年10月1日)

山形経済同友会ホームページ「未来かがやくやまがた景
観賞」 (<http://yamagata-doyukai.jp/keikan/result-future/>)
(最終閲覧日：2021年10月1日)